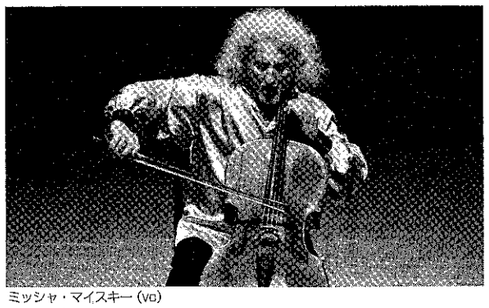
河村尚子（p）、ノリントン／N響


ミッシャ・マイスキー（vc）

オーケストラ

NHK交響楽団（第1726回）

4月25日・サントリーホール
出演●ノリントン（指揮）、河村尚子（p）
曲目●ベートーヴェン「序曲《コリオラン》」、ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第4番」、ブラームス「交響曲第2番」

4月の定期演奏会は3プログラムともノリントンが指揮台に立った。昨年から始まったN響とのベートーヴェン交響曲全曲演奏シリーズの2回目という位置づけになるが、ベートーヴェン以外の作品、ブラームスやティペットの交響曲も取り上げられた。Bプロの冒頭は《コリオラン》序曲。当然ながら、古楽探究に発する彼のベートーヴェン交響曲解釈と軌を一にするもので、楽器群の着席配置も独特。金管楽器の突発やティンパニの強打が聴き手を襲う。〝ノリントンのベートーヴェン〟をミニチュア版で味わうことができた。ブラームスも、この指揮者らしい演奏。聴き慣れた作品から多くの新鮮な箇所を現出させる。次々と引き出しを開けてみては、その中身を手品師のごとく巧みに聴衆に示してゆく。それがうまくブラームスの音楽の個性や特質と噛み合ったときは目から鱗の思いがしたが、逆に、わざとらしく落ち着きが悪いと感じる場合もあった。河村のソロによる第4協奏曲は、ノリントンへの彼女の穂極的な表現上の切込みを期待したが、いささか相手が老練すぎた。●岩下眞好

オーケストラ

NHK交響楽団（第1728回）

5月19日・NHKホール
出演●広上淳一（指揮）、竹島悟史、植松透、石川達也、西久保友広、村井祐児（以上perc）、ラヘル・フレンケル（Ms）
曲目●武満徹《フロム・ミー・フローズ・ホワット・ユー・コール・タイム》、バーバー《弦楽のためのアダージョ》、バーンスタイン「交響曲第1番《エレミア》」

変幻する音響ばかりでなく、創造の喜びを感じさせるステージ・プレゼンスでNHKホールを神秘的かつ祝祭的な空間に変えた5人のパーカッショニスト――N響の竹島悟史、植松透、石川達也、読売日響の西久保友広、シエナ・ウィンドの村居勲に喝采を。広大なホールに風がそよぐ。5人の立ち居振る舞いに微笑みを寄せつつ、ここぞという場面では楽想の「うつろい」や「うねり」をオーケストラと聴き手に授ける広上淳一のタクトも見事だ。

バーバーの《アダージョ》で広上とN響のメンバーが紡いだのは、癒しでも優しさでもなく、厳しい音の連続だった。指揮者の内なる尽きせぬ音楽への想いがついに爆発したとしても、N響の高機能弦楽セクションは、ある意味、冷静さを失わない。バーンスタイン初の宗教的大作である「交響曲第1番《エレミア》」と広上の音楽観は、まさに相思相愛。一切の迷いもブレもなく、N響を整えてゆく。細部をさらに磨いて欲しいとは好演ゆえの欲。イスラエルの若手ラヘル・フレンケルはこれから檜舞台で喝采を浴びそうだ。●奥田佳道

オーケストラ

東京ニューシティー管弦楽団（第81回）

4月25日・東京オペラシティコンサートホール
出演●内藤彰（指揮）、東京合唱協会（合唱）
曲目●松村禎三《ゲッセマネの夜に》、ヴェルディ「レクイエム」

指揮者内藤彰の独創的な選曲眼が聴衆をそそる東京ニューシティ管弦楽団のコンサート。当夜の前半は松村禎三《ゲッセマネの夜に》（06年改訂版）を披露。最後の晩餐の地に漂う不穏な空気を描き、打楽器の3名が音量を絞る技に感嘆した。続いて東京合唱協会第21回定期と兼ねてのヴェルディ「レクイエム」。内藤の新企画は終曲《リベラ・メ》に1869年時の楽譜を用いたこと。現行版に代えて、13名の手になる《ロッシーニのためのミサ曲》に与えた《リベラ・メ》（後に改稿し「レクイエム」に挿入）が採用された。まずは金管の熱演に心打たれ、コーラスの整った響きにも感嘆したが、残念なのが独唱水準のばらつき。女声4名ずつ男声各3名と大人数が起用されたが、有名な第一声をやり損ない、オペラティックに過ぎる歌いまわしを滔々と披露という一部のソリスト勢には曲に対する姿勢の再考を促したい。中では浪川佳代（S）のふくよかさ、山下牧子（Ms）の濃密な声音、押川浩士（B）の滑らかさと大塚博幸（B）の朴訥でも敬虔な歌いぶりに注目した。●岸 純信

オーケストラ

新日本フィルハーモニー交響楽団（第494回）

5月18日・すみだトリフォニーホール
出演●クリスティアン・アルミンク（指揮）、天羽明惠（S）、アネリー・ペーボ（A）、望月哲也（T）、イシュトヴァーン・コヴァーチ（Br）、他
曲目●ドヴォルザーク「交響詩《金の紡ぎ車》」、マーラー《嘆きの歌》（初稿版）

意欲的な選曲だ。このようなレパートリー開拓こそ、アルミンクと新日本フィルの真骨頂である。《金の紡ぎ車》に大幅なカットが施されていたのには共感しかねるが、《嘆きの歌》が第一部《森のメルヘン》を復活させた初稿版で演奏されたことは、この物語をよりよく理解する意味でも歓迎すべきことであった。後者では声楽陣も奮闘、栗友会合唱団の中のソロもよく歌っていた。ただ東京少年少女合唱隊メンバーによるソロには――それが最も重要な印象深い個所でソロを受け持つだけに――もっと安定した歌唱を求めたい。第3部でのバンダも、もう少し客席へ明瞭に音が届かないと、その劇的効果が生きないだろう。

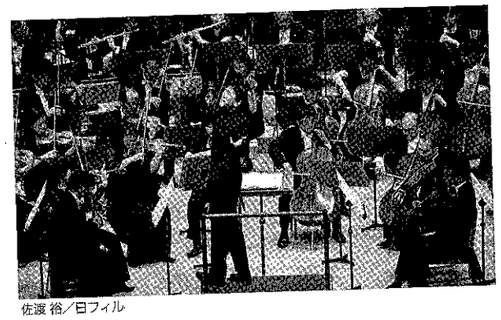
新日本フィルも総じて力演であったことは事実だが、この半年来続いている一部の金管の不安定さは如何ともしがたく、同楽団のイメージ低下にも繋がりかねないのではないか。1年半前ほどまでのこの指揮者とこのオケだったら、2曲ともさらに弾力のある躍動的な、緻密に引き締まって透徹した音色の演奏が可能だったろうという気もする。●東条碩夫

弦管

ミッシャ・マイスキー vc

5月21日・サントリーホール
出演●ミッシャ・マイスキー（vc）
曲目●バッハ「無伴奏チェロ組曲第3番」「同第2番」「同第5番」

別府でアルゲリッチと共演したばかりのマイスキーによるバッハ無伴奏組曲。「第3番」のプレリュードは八長調音階を下降して始まり、「第5番」のジーグは八短調ト二力をのぼって主音に降りて終わる。つまりC音に始まってC音で幕を引くプログラム。音の環を意識した小粋な選曲だ。軽めのボウイング、速めのテンポ、奔放な揺らし、自在なダイナミクス、決め音の強調、リピートで時折瞬間的につけられる洒落た装飾。曲ごとに色の異なるドレスシャツ。なにもかも彼独自の世界である。「第3番」はやや粗く、音程の精度を欠く箇所も見受けられたが、それも音楽の勢いの前には些事にすぎなかった。2曲目からは音の密度がぐっと高くなり、目立つ音程難もなく、気合いの入った真摯なバッハが紡がれた。一フレーズずつ噛みしめるように奏されたサラバンド、アタッカで入って本流の如くに流れたジーグ。「第5番」でもそのテンションはさらに高まり、アンコールでは「第一番」前半を弾いたあと、再登場してなんと後半もサーヴィス。興に乗った演奏家をみる喜び、ここにきわまった。●萩谷由喜子


佐渡裕／日フィル

ヴィルデ・フラング（vn）＆ミハイル・リフィッツ（p）

オーケストラ

神奈川フィルハーモニー管弦楽団（第281回）

5月25日・横浜みなとみらいホール
出演●現田茂夫（指揮）、後藤正孝（p）
曲目●リスト「交響詩《前奏曲》」、リスト「ピアノ協奏曲第1番」、ワーグナー《ヴァルハラ城への神々の入場》、《森のささやき》、《ジークフリートの葬送行進曲》、他

プログラムには縁の深い2人の作曲家の名作が選ばれていた。ピアノには内外の多くのタイトルを受けている気鋭の後藤正孝、棒は名誉指揮者現田茂夫。となればオーケストラに自ずと気合いが入る。第一曲の「前奏曲」から響きは充実し、流暢に淀みなく音楽は進みながら、現田はそのうちで愛の優しみ、勇壮な力感を明確に紡ぎ出した。弦と管、旋律とハーモニーの綾織り。「ピアノ協奏曲第一番」では、後藤のピアノが冴えわたった。今のピアニストにはリストの難技巧も造作なく、力感に抒情を潜め、颯爽と弾き上げていく。が、歌謡性もしっかり踏まえた。そして華麗果敢な終章。だがしかし、眼目はワーグナー。現田は常任時代に、このオケの定演で、「ワルキューレ」第一幕」全曲の名演を聴かせたが、ここでの抜粋も素晴らしいというより凄かった。迫力絶大な〈ワルキューレの騎行〉。正に天空を駆ける戦さ女、瞑黙して聴けば〈魔の炎の音楽〉にヴォータン、ブリュンヒルデの姿が。《神々の黄昏》の燃え盛る炎に身を投じる〈ブリュンヒルデの自己犠牲〉、圧巻。●小山 晃

オーケストラ

日本フィルハーモニー交響楽団（第350回名曲コンサート）

5月27日・サントリーホール
出演●佐渡裕（指揮）
曲目●マーラー「交響曲第6番《悲劇的》」

佐渡裕がマーラーの「第6番」を振る。わくわくするのが〝当然〟もいえるプログラムである。この「第6番」は全交響曲の中でも、オーケストラにとっても指揮者にとってもヘヴィな難曲として知られるが、佐渡と日フィルは期待通りやってくれる予感が先にあった。冒頭から筆圧の強い、しかし腰の据わった演奏。しかし腰の据わった気迫と緊張感の漲る演奏にたちまち引き込まれる。佐渡の指揮は巨大な編成の隅々まで血を通わせ、奮い立たせるヴィヴィッドな表現を貫く。力で押すだけではなく繊細でロマンやノスタルジックなフレーズの扱い方も周到。例えば第2楽章の俗っぽい諧謔的な世界と第3楽章の品格の高い抒情美の世界との際立たせ方の旨さはこの上ないし、個々の奏者というよりもオーケストラが有機的に一体化しているのを痛感させられる。終楽章における複数の主要楽想のテンポや表現法には余裕がうかがえ、それらが同時に絡み合う複雑な再現部なども明快に聴き分けられ、実に痛快。3度打たれるハンマーの厳粛さも〝観て〟聴いて楽しい。曲の真価と佐渡の力量を再認識させられた圧巻の演奏だった。●齋藤弘美

オーケストラ

東京都交響楽団（第735回）

5月21日・東京文化会館
出演●イオン・マリン（指揮）、アントニオ・メネセス（vc）
曲目●ワーグナー「歌劇《リエンツィ》序曲」、シューマン「チェロ協奏曲」、フランク「交響曲ニ短調」

イオン・マリンは、都響を自在に操って自己の意図する表現をのびのびと繰り広げ、その得難い才能をはっきりと印象づけていた。立体感に富んだ程良くカラフルなサウンドを駆使して綴られたワーグナーは、悠然とした音楽の流れが見事な演奏であったが、細部の表現の精妙さにもこの指揮者の非凡な手腕が浮き彫りにされていた。都響から重厚で重みのあるサウンドを引き出し、作品の渋くくすんだ色彩感と堅固な構成力を巧みに把握したレアリザシオンが実現されていたフランクは、内に秘められたたぎるような情熱も強いアピールを放っていた熱演であり、マリンの豊かな底力を特に強く感じさせずにはおかない内容になっていた。さらにここでは、都響の管楽器群の健闘にも見るべきものがあったといってよい。シューマンでは、メネセスが精確で隙のない左手のテクニックとムラのないボウイングを活かし、入念に吟味された ロマンティックで円熟味のある妙演を展開していた。マリンと都響との出会いは、筆者が当初想像していた以上に幸福なものであったようだ。●柴田龍一

弦管

ヴィルデ・フラング vn

5月16日・Hakuju Hall
出演●ヴィルデ・フラング（vn）、ミハイル・リフィッツ（p）
曲目●モーツァルト「ヴァイオリン・ソナタ第25番」、ブラームス「3つのハンガリー舞曲」、プロコフィエフ「ヴァイオリン・ソナタ第2番」

ノルウェー出身の若きヴァイオリニスト、ヴィルデ・フラングがHakuju Hallの「リクライニング・コンサート」に出演した。最初のモーツァルトのソナタから、抜群のボウイングのコントロールを披露。跳ね弓一つをとっても、非常に多彩。続くブラームスの「ハンガリー舞曲」からの3曲では、密度の高い音とともに、楽曲に対する集中度の高さを示した。最後のプロコフィエフのソナタは、アグレッシヴな演奏。テンションを高めたり、解放的になったり、起伏に富む。音も充実している。ここでもボウイングのテクニックが素晴らしく、ヴィブラートの使い分けも考えられている。終楽章は多少力が入りすぎていたかもしれない。

全体を通じて、彼女の技巧の高さに圧倒された。ただし、そのパワフルな演奏は、音の出し方が常に大ホール向けに感じられ、この日のような小振りな室内楽ホールではいささか違和感も覚えた。ピアノ共演はウズベキスタン出身のミハイル・リフィッツ。一見クールに合わせていたが、スケールの大きさがあり、ソロも聴いてみたくなった。●山田治生